

謙吾が優奈を犯している間、ずっと正座をしていた光雄は表情をパツと明るくすると、すぐに優奈に這い寄っていく。

「ゆ、優奈ちゃん、いいよね？」

そして無抵抗の優奈を四つん這いにさせると、背後から挿入していく。

「光雄っ！ やめろっ、やめてくれえっ！」

純也の悲痛な叫びを無視して、光雄は恍惚こうこつとした顔をしながら腰を送っていく。

「あっ、はぁぁん……」

鼻にかかった声をもらす優奈を、ベッドの脇に立ったまま見ていた麗子は、なにを思ったのか、突然、黒のドレスを脱ぎはじめた。黒いブラジャーとパンティに包まれた見事なプロポーションは、その場にいた全員の視線を釘づけにする。

さらに驚いたことに、麗子はパンティまでおろしていくではないか。躊躇ちゆうちよせずにくるくると丸めるようにしておろすと、サツと足先から抜き去ってしまった。逆三角形の薄めの陰毛があらわになり、さすがに恥ずかしいのか上半身をポーツとピンク色に染めている。

「彼、もうあなたには必要ないでしょ？」

優奈に向けてそう言いながらベッドにあがると、両手両足に手錠をかけられた純也

の腰にまたがっていく。

「ちょ、ちよつとなにすんだよっ」

面食らったのは、まだ童貞の純也だ。優奈が犯されるところを見せつけられ、不覚にも肉棒は天井に向かってそそり勃っていたのだ。

「わたしのヴァーजनを破れるのよ、光栄に思うのね」

純也の股間にまたがった麗子は、右手を股の下に持っていていきペニスを固定する。

「待ってくれよ、俺は優奈と——」

「フフツ、黙りなさい。あなたの役目は穴を開けることだけよ」

そして勃起したペニスの上に、ゆっくりと腰をおろしていく。

「ううっ……」

童貞ペニスの先端を生温かい粘膜に包まれ、純也は思わずうなっていた。そして生温かさは、どんどんペニス全体を包みこんでいく。

「はんっ、うぐうっ……」

途中、なにかに突き当たり麗子が苦しそうな顔をしてうめいたが、メリツという感触とともに無事通過した。

「ああ、純也……あんっ……」



優奈は朦朧とする意識のなかで、純也の上に黒いブラジャーだけを身に着けた麗子がまたがっているのを見た。

純也はとろけそうな顔をしながらも必死に射精をこらえているようだ。麗子は破瓜の苦痛と戦っているのか、眉間に縦皺を刻みながらそれでも腰を上下に動かしている。

「麗子さま……なんでこんなこと……」

「おい、センパイ、しゃべる暇があつたらコイツをしゃぶりな」

バックから犯されている優奈の唇に、さっきまで絨毯の上に倒れこんでいた謙吾が、萎えかけたペニスを擦りつけてくる。

「はむっ、はぐうう……」

恐ろしい現実を忘れようとするかのように、優奈は夢中で後輩の醜悪なペニスを頬張っていた。口のなかで硬度を増していくペニスを感じながら、膣肉を光雄に挟られていると、不思議なことに純也のことがどうでもよくなってくる。

「い、いやらしいわ……前と後ろから犯されて……それでも感じてるのね……可愛い……可愛いわ、優奈」

初めて麗子に名前を呼ばれた優奈は、心の底から喜びを感じていた。自然とフェラチオにも熱が入っていく。すると謙吾が射精をこらえて顔を歪ませる。

麗子の苦しげなうめきには、いつしか甘い声が混ざりはじめる。早くも麗子は破瓜の痛みのなかに、わずかな快感を見つけたでいた。その麗子の声に同調するように、優奈が悩ましげに腰を揺すれば、光雄は激しくペニスを抜き差しする。

「優奈……ああ、わたしと一緒にイクのよ」

麗子は純也の股間で腰をバウンドさせながらブラジャーをはずし、その美乳を自分の手ですくいあげ、セクシーな仕草で揉みしだく。コリコリに充血した乳首がいやらしい。

ペニスだけでなく視覚的にも刺激された純也は、こみあげてくる射精感を必死で我慢していた。もう優奈のことを気にしている余裕はない。

前後から犯されている優奈は、美少女に何度も名前を呼ばれて、恍惚こうこつとした表情になっていた。

「うんっ、うんっ、くふうんっ」

チュパチュパと音をさせながらペニスをしゃぶる優奈の頭のなかには、もう謙吾も光雄も、純也さえもいなかった。今の優奈に見えているのは麗子の姿だけだ。

男の腰にまたがって、美しくも淫らに身体を揺すっている麗子の姿を、優奈は二本のペニスに犯されながらウットリと見つめていた。